

(旧)日本南画院の活動とその意義

—現代水墨画への影響をめぐって—

村田 隆志 (大阪国際大学)

近代日本美術史の研究においては、多く新派の画家たちに注意が払われてきた。これに対して、旧派の画家たちについての研究蓄積はかなり乏しく、その実態については不明瞭な点が多い。本発表はこのような状況を背景として、旧派に属する作家たちのうち、人数・勢力の観点から主流派と目される近代の南画家たちが重要な活動の場とした(旧)日本南画院(以下「南画院」)の諸活動について分析し、現代にまで続くその影響を論じるものである。

南画院は大正十年(1921)に発会式が行われ、以降16年間にわたって活動を展開した団体である。京都の若手作家、水田竹圃、河野秋邨、三井飯山を発起人とし、田近竹邨、山田介堂、池田桂仙を迎えて6人が同人となり、富岡鉄斎、長尾雨山、内藤湖南を顧問として発足した南画院は、当初は京都系の作家のみの団体であったが、翌年の第2回展までには大阪の矢野橋村、東京の小室翠雲が参加し、全国的な規模を持つ組織として動き始めた。すでに文部省美術展覧会(文展)や帝国美術院展覧会(帝展)審査員を務めるなど、南画壇を代表する作家として知られていた翠雲は、南画院発会以前から南画家の東西提携を模索しており、その参加は南画院に大きな影響を与えることとなった。

南画院の活動としては、伝統的な南画の墨守のみに留まらない多様な画風を尊重し、その評価が積極的に行われたことがまず挙げられる。水越松南や山口八九子、石川寒巖、田中咄哉が同人に推され、客員として島田墨仙、小杉未醒、藤島武二らまでもを迎えていたことは、近代南画の表現の多様化に寄与したものと考えられる。

また、南画院は広く一般への南画趣味の普及を図ってもいた。昭和七年(1932)に翠雲が会長となり、「南画院の主義主張の宣伝機関」として立ち上げた「南画鑑賞会」は、機関誌『南画鑑賞』を刊行し、当時の美術史研究者の論考や評論を多数掲載していた。南画の通信教育までもが行われ、誌上添削や習画展という発表の機会まで設定していたことは特筆される。

南画院は、帝展の改組に対しての意見の相違によって解散し、昭和十一年(1936)にその歴史に終止符を打ったが、その後、南画家たちは戦前の南画連盟や大東南宗院を経て、昭和三五年(1960)に(現)日本南画院を結成し、現在に至っている。この間、昭和二十年(1945)に翠雲は逝去しているが、(現)日本南画院の初期の活動は戦前の南画院の活動の影響を色濃く残すものであったと位置づけられる。その理由としては、日展とは別の作品発表の場となった(現)日本南画院の次代以降の担い手たちは、そのほとんどが非専門の画家、つまりは一般への南画趣味普及によって近代南画・現代水墨画への興味を喚起された人々であったことを挙げられよう。そして、このことが、現代において日本画壇と水墨画壇が画然と分かれたる遠因となったことについても指摘したい。